# 第８７回　まちづくり夜楽塾記録

『家康と朝鮮通信使』 ～朝鮮通信使浜名湖ウォークを前にして～

澤田ひろ子さん (静岡県余暇プランナー協会　西部ブロック)
平成 21 年 9 月 30 日 (水) 19:00～20：30

◆自己紹介

私は、ただの専業主婦です。ふとしたきっかけで行政マンを交えて２年間学習する機会がありました。全く何を言っているのか分からない状態からしごかれ、その中で「能力がないのではなく経験がない。」ということを一つ学び、本日も恐れもなくお話をさせていただくことになりました。

今回は、入門編ということで仲間と一緒に学んだことをお話しいたします。みなさんがもっと勉強したいと思っていただければ、いつか遠州地域の朝鮮通信使についての会を持ちたいと思っています。その時はご協力をお願いいたします。

◆朝鮮通信使とは

一般的に朝鮮通信使というと江戸時代のことを指すが、すでに室町時代から使者と国書に対する返礼ということで行われていた。しかし、室町幕府が衰えるとともに朝鮮通信使もそのままになってしまった。

では、なぜ家康が室町時代に行われていた使節をやろうと思ったのか。それは、江戸幕府初期の頃はまだ政権が安定せず、家康は幕府の権威と財政力を高める政策の一つとして朝鮮通信使に目を付けた。

◆日韓の交流

ご存知のとおり、秀吉の時代、２度朝鮮半島に出兵し、朝鮮半島は戦場と化し、捕虜として陶工や、儒学者、女性、農民までも日本に連れてきてしまった。李朝にしてみれば、突然戦争を仕掛けられた日本にいい感情は持っていない。そんな関係について家康はこのままでいいのかと考えた。また、徳川幕府をどう治めるかを考えた時、室町幕府が滅びたのは、財力が衰えたことが原因の一つだということを家康はよく知っていたので、経済力として貿易は独占した方がよく、貿易をする力は権威にもなると考えいち早く外交関係を結びたいと考えた。

◆通信と通商

通信と通商、何が違うのか。通信というと電話や郵送などの伝達をイメージするが、その頃の通信の信は、人間の徳の中の一つ、仁や儀、忠というような徳の一つであり、通商とは商いをもってお付き合いをいたしましょうという意味である。

鎖国をしていた江戸時代、唯一正式な外交関係を持っていたのが朝鮮国である。また、外交関係を正式に結ぶのではなく商いでお付き合いをしましょうと貿易をしていたのが明とオランダである。

◆朝鮮通信使（全１２回）

外交関係を結んだ朝鮮通信使は、全部で１２回日本に来ている。今回は「家康と朝鮮通信使」というタイトルなので１回目の話を中心にしたいと思う。

家康は最初、日本と朝鮮の真ん中、対馬の宗氏を通じ外交関係を結ぼうと考えたが、朝鮮国にしてみれば、戦争を仕掛けられた国から突然仲良くしましょうと言われても素直に頷けるわけがない。宗氏は三度ほど使者を送ったが、三度とも使者は戻って来なかった。それほど向こうは怒っていたわけである。しかし、朝鮮国は朝鮮国でいろいろな事情があり、日本とケンカをしているよりは仲良くしておいたほうがいいと使節を送るようになった。ただし、最初は心と心を通わせる通信使ではなく、回答兼刷還使（かいとうけんさっかんし）という使いを出し朝鮮国は２つの条件を出した。１つは朝鮮国の国王の墓を暴いた犯人を引き出すこと、２つ目は、家康から先に国書を送ること。これは、家康からお願いしたという証明になる重要なことであった。そのことについて日本は、別の犯罪で死刑

が確定した者に罪をきせ、国書についても、ＮＨＫの番組でも取り上げていたが、仲介に入った宗氏が書き換えていたのではとの疑いがある。しかし、当時もお互い本当のことは分かっているがなんとかうまくやっていきたいという思いがあってか、とりあえず形が整ったということでスタートしたのだと思う。

◆通信使の行程と人数

第１回目の朝鮮通信使は、１６０７年。家康はすでに将軍職を譲り静岡に隠居している時代に刷還使（さっかんし）が来た。回答として、先ほど説明した２つの条件と慶長の役で日本に連れて行かれた人達を連れ帰るという目的で３回までそういう形でやってきた。

規模については、朝鮮からの使節は、約３～５００人、日本側の警備を入れると総勢３～４０００人ということで江戸幕府の国家予算に相当する金額が使われた。ただし、その金額のすべてを江戸幕府が負担している訳ではなく各大名も負担している。

◆通信使の編成

朝鮮国は文化の力で日本を見返そうと超一流の文化人を揃え、正史（トップの位）以外は、出来る限り顔がきれいな人、頭がいい人を優先的に、書や絵画ができる身分の高い少童、音楽隊、通訳や医者、画家、馬術が出来る人などを連れてきた。ただし、儒教の国なので当然男性だけで来ている。

◆日本側の対応

日本からは、警備をする人、荷物を運ぶ人などが各地域で割り当てられたという記録が新居町の神宮寺に残っている。また、滋賀県に今も残る朝鮮街道は、家康が関ヶ原の戦いで勝って凱旋をしたという縁起のいい街道で、宮中の使いと朝鮮通信使だけに一部４０キロほどを使わせた。また、景色がよいことで有名な薩埵峠は、海岸端の道では危険ということで新に上の方に作らせた道である。また、江戸幕府は本来、大きな川に橋を架けなかったが、通信使が来たときだけ、船を並ばせその上に板を乗せて臨時の橋を作った。天竜川もそうやって渡っている。

◆江戸時代の韓流ブーム

家康の時代から変わるが、大名行列は「下に～下に～」と見ることが出来なかったと私たちは教わったが、朝鮮通信使に関して見学は自由だったという。１２回というとだいたい徳川幕府２５０年で計算上は一生のうち１．５回は見られたことになる。

また新居町の神宮寺では、忠臣蔵の土屋主税が接待役を申し付けられ、浜名湖を船で渡すことが重要な役目だったため、「どうか無事に浜名湖を渡らせてほしい」と願いを掛けたという記録が残っている。

浜松の宿では、一流の文化人がいる通信使に町民が押しかけ、あまりの熱心さに夜も眠れなかったそうだ。横須賀（今の掛川市）は、朝鮮通信使を見たいと村を上げて見に行ってしまったのでどろぼうが入らないよう、村役人が警備したという記録も残っている。駿府では、大井川の川の勢いを止めるため人足たちが冬の川に並んで立ち渡したそうだ。また、朝鮮通信使は、望まれると山門などに字を書いてあげていて、清見寺にその資料が数多く残っている。

また、資料があまり残っていないと言いながら各地で少し残っているものもある。近江八幡には朝鮮通信使が郷土人形として残り、岡山県の牛窓町では、朝鮮通信使を見た記憶が踊りとして残っている。三重県の津では、祭りとして残り、大垣では当時の服が残っている。

◆身近なことから国際化を考えよう

朝鮮通信使というと忘れてはいけないのは雨森芳洲という人物。滋賀県の高槻市に生まれた雨森は木下順庵という儒学者のもとに生まれ、兄弟子は新井白石と言えばどのくらいのレベルか分かると思う。対馬藩に仕えた雨森は「誠信に交わるということを人々はいうけれども多くは字の意味をはっきりとはわきまえていない。誠信とは実意ということやお互いにうそを言わない、戦わない心を持って付き合い、真実を持って交わることが誠の心である。」と言っている。忘れられてしまった朝鮮通信使が、秀吉の時代のあの戦を乗り越え平和な時代に家康がもう一度関係を作ってくれたことを私は通信使を通じて伝えたい。

また、実際に通信使の現場を見たい方は、朝鮮通信使ウォークにぜひご参加してください。

Q：国家予算に相当するお金を使ったそうですが、幕府と大名との負担の割合は？
A：負担の割合まではしっかりと調べていませんが、徳川幕府としては、大名の財政力を削ぐという目的もありました。大きく大名のほうに費用の負担を押し付けています。大名が負担するということは地域の人もそれ相当の負担をさせています。もちろん幕府は幕府で出していますが。

Q：浜松合戦の凧揚げで平田の凧が通信使に関係あると聞いていますが。
A：知りませんでした。浜松も宿場になっていますのでありえますね。またそういう情報がありましたら教えてください。（※後で調べたら琉球に関係する絵柄でした。）

Q：頂いたパンフレットが古いと思いますが。
A：一昨年作ったものです。浜松市としてこの事業にエントリーしたいと言いましたが、浜松市はブラジルと言われてあきらめてしまいました。次回機会があればエントリーしたいです。

Q：１０月１０日開催のウォークの昼食に「ぼく飯（めし）」と書いてありますが、これは何ですか。
A：新居町の郷土料理だそうで、ひつまぶしのようにうなぎを小さく切ったものです。「ぼく飯」というのはもともと大きく育ちすぎてしまったうなぎを漁師さんがどうしたらおいしく食べられるかと考えたもので、蒲焼風でごまと一緒に炊き込んだおいしい炊き込みご飯です。

Q：韓国では朝鮮通信使をどのように教えていますか。
A：韓国の教科書にも若干載っていますが、記述はどちらかというと日本とは逆で日本から要請をされたと書いてあります。最近では、教科書の内容を検討、統一する動きもありますので今後はまた変わってくるかと思います。

Q：秀吉が日本へ連れてきてしまった朝鮮人はきちんと帰しましたか。
A：第３回目までは呼びかけをして実際に帰りました。しかし、学者はすぐに帰りましたが、陶工に関しては、韓国より待遇のよい日本を選び帰らなかった人もいます。また情報そのものが入らなかった人もいたそうです。しかし、３回目になるともう世代が変わってしまい、日本を故郷にしている人もいらしたみたいです。最初の年が一番多く千何人帰ったそうです。